アサシンガール
ASSASSIN GIRL
蒼井村正
AOI MURAMASA
表紙イラスト：
日之下あかめ
HINOSHITA AKAME
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『アサシンガール』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

アサシンガール

ASSASSIN GIRL

蒼井村正

表紙／日之下あかめ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

凛（りん）

十数代わたり脈々と続く暗殺者一族の血を受け継ぐ少女。自己催眠を用いてさまざまな人格に擬態し、ターゲットに近づく手法を得意としている。

理事長（りじちょう）

若くしてスポーツエリート校の理事長となった、顔立ちの端整な男。今回の凛のターゲット。

鼓弓の柔らかな旋律が流れる廊下を、チャイナドレス姿の少女が歩いていた。
深い蒼地に、銀糸で刺繍(ししゅう)の施されたドレスの表面には、しなやかなプロポーションが浮き出ている。ヒップはキュッと小振りに引き締まり、程良いサイズのバストはチャイナドレスの胸元をツンと突き上げて誇らしげだ。
頭の両側で黒髪を団子状に結い上げ、ほお骨のラインと切れ長の目尻に薄く紅をさした、中国風の化粧を施していた。身長は百六十五センチ前後、ちょっと気の強そうな顔立ちをした、なかなかの美少女である。
彼女は、料理の大皿が載ったワゴンを静かに押して歩いていた。目指しているのは、廊下の突き当たりにある個室。
閉ざされたドアの前には、黒いスーツ姿をまとった、凶暴そうな人相の男たちが数名たたずんでいる。
「お料理をお持ちいたしました」
かすかなおびえを含んだ声で少女は告げる。二人の男が気怠げな足運びで近づいてきた。
一人は料理の載ったワゴンを調べ、もう一人は小型の金属探知機で少女の身体をスキャンし始める。
「武器は持ってねぇようだな、念のためにボディチェックさせてもらうぜ」
金属探知機で身体の表面を撫でるように探ったあと、黒スーツ姿の男は役得とばかりに

少女の身体を弄(いじ)り回してくる。
引き締まったヒップがサワサワと撫で回され、細くくびれたウエストを指がくすぐり上がってくる。クモが這(は)い上がってくるかのような不快な感触に、少女の顔が強張った。
拒否の声が上がらぬのに調子づいた男の手が、チャイナドレスの胸元を形良く盛り上げた美乳の曲面を無造作に握り締める。
蒼いシルク生地の下で、弾力たっぷりの乳果が、ムニュッ、とたわんだ。
「いい弾力だ……お嬢ちゃん、いい身体してるぜ」
紅潮した耳元にタバコ臭い息を吐きかけながら、男は十代の美乳をこね回し、もう一方の手で尻を撫でる。チャイナドレスのスリットから侵入してきた手が、コットンショーツに包まれた尻たぶを掴み、下着越しに尻の谷間を探ってきた。
「んっ……んふ……ンッ……」
恥ずかしげに頬を染め、眉を寄せながらも、少女はなすがままになっている。
何をされても逆らわぬように、店長から固く命じられているのだ。それをいいことに、黒服の男は少女の乳房を好き放題に揉みこね、チャイナドレスのスリットから差し入れた手で滑らかな腿を撫で回す。
「こっちは異常なし……おい、料理が冷めちまうぞ」
ワゴンをチェックしていた方が、少女を弄り回している男に羨ましげな視線を向けつつ

たしなめた。
「ちっ、……行け」
少女の股間まであとわずかの所に指を迫らせていた男は、恥じらい震えるしなやかな肢体を、名残惜しげに解放する。
強引なボディチェックからようやく解放されたチャイナドレスの少女は、料理を載せたワゴンを押し、最上級の顧客のみが利用を許された個室へと足を踏み入れた。
直径二メートルほどの丸テーブルを間に挟んで談笑しているのは、初老のアジア系男性と、中年の白人男性だった。この都市の裏社会を二分する犯罪組織幹部の会食である。
二つの犯罪組織間で同盟が結ばれたことを祝って、トップ同士が宴席を開いているのだ。
彼らの背後で人形のように無表情で突っ立っているのは、双方から一名ずつ出席した腕利きのボディガードだ。
一礼した少女は、テーブルに料理を並べ始めた。
「お嬢さん、初めて見る顔だね、君の名前は？」
チャイナ少女の横顔に、好色そうな視線を注いでいたアジア系マフィアのボスは、酒臭い息を吐きながら問いかけてきた。
「……死神、です」
小さな声で答えるやいなや、目にも止まらぬ速度で少女の右手が翻った。五指を伸ばし

た掌が、ボスの胸のあたりを、ポンッ、と軽く叩いた。
「はぅ……ッ!!」
好色そうな笑みを浮かべていた男の顔から表情が消え、小さな呻き声が喉奥から漏れる。滑るような足さばきで白人幹部に近づいた少女は、怪訝(けげん)そうな表情を浮かべる男性の額に掌を打ちつけた。
パンッ！　軽い打音が上がる。
どちらの打撃も、ふざけて叩いたとしか思えない軽いものに見えた、しかし……。
アジア系マフィアのボスが、前のめりに倒れてスープ皿に顔を突っ込み、白人男性が椅子の上で大きくのけ反ったまま動きを止める。
「!?」
異常に気づいた護衛たちが行動を起こすよりも早く、少女の身体がテーブルの上にフワリと舞い上がる。蒼い蝶の飛翔を思わせる、軽やかな体さばきであった。
チャイナドレスの裾が大きくめくれ上がり、白い生足があらわになる。
懐から銃を抜こうとしていたボディガードの頭部を平手が叩き、緩やかに身体を旋回させつつ、もう一人の胸を打った。
ほとんど音もしないような軽い打撃にもかかわらず、二人のボディガードは糸を切られた操り人形のように床に倒れ伏して動かなくなる。

ワゴンを押し、チャイナドレスの少女は個室を出た。
ドアの前を固めていた護衛の連中も、室内の出来事に気づかぬようであった。何事もなかったかのように彼らに一礼しつつ、少女は少し足早に歩み去ってゆく。
彼女の名は凜(りん)。練り上げた気を体内の一点に収束して打ち込むことにより、一切の外傷を残さずに敵を葬る暗殺拳、「内破拳」を使う少女暗殺者であった。

「依頼、完了したよ」
高級レストランを抜け出した凜は、暗殺の仲介業者に携帯電話で連絡を取った。
今はチャイナドレス姿ではなく、ルーズフィットの白いコットンシャツと、洗いざらしのジーンズというラフな服装である。化粧を落とした顔立ちは、やや気が強そうな十代少女のものだ。長髪を夜風になびかせて颯爽と歩きながら、若き暗殺者は通話を続けている。
「ご苦労。殺害確認ガ取レタラ、報酬ヲ振リ込ム」
電子合成された音声が、無機的な声で応じる。
「毎度あり♪」
お茶目な口調で告げる凜。潜入先のレストランでは、無口で恥ずかしがり屋の少女を演じていたのだが、本来は明朗快活で陽気な性格なのである。
臆病で恥ずかしがり屋なウェイトレスという偽りの人格は、チャイナドレスとともに脱

ぎ捨ててきていた。
「任務の無事完了は嬉しいけど、あの店のまかない料理のチャーハンが食べられなくなるのは惜しいな。すっごく美味しいんだよ。家庭では出せない味♪」
暗殺実行のために潜入していたレストランとの決別を、少し惜しむ凜。彼女はターゲットに接近するために、自己催眠を用いてさまざまな人格を巧みに使い分ける。それは演技という範疇にとどまらず、ほとんど別人格の憑依レベルに達しており、暗殺実行のその瞬間まで、誰にも疑いを抱かせぬ完璧な擬態を可能にしていた。
「新タナ依頼ガアル」
彼女の軽口に応じる素振りも見せず、電子音声は淡々と用件を告げる。
「わお、大忙しだね。依頼内容を聞かせて」
無機質な声で告げられるターゲットの名を聞いた凜の顔が、わずかに強張った。
「立派ですねぇ……さすがは学生スポーツのエリート校」
メガネのレンズ越しに校舎を見上げ、ブレザー姿の少女はのほほんとした声を上げる。
少女は凜であった。長い黒髪をリボンでまとめ、赤いフレームのメガネをかけていた。
立ち姿からも、いかにも育ちのよさそうなお嬢様っぽさが漂っている。
今回彼女が演じているのは、東欧のさる国からの帰国子女というものであった。

編入手続きのための書類は、凛に暗殺を仲介した組織が用意してくれている。
学園の門をくぐって数分後、少女は一人の男と対面していた。
軽くウエーブのかかった髪を上品に撫でつけた、四十代後半の男性である。
がっちりした体つきで、顔立ちも端整だ。少年のように澄んだ目が、強い光を放っている。その目でじっと見つめられると、黒い瞳の中に吸い込まれていきそうな気分になってしまう。
（女殺しの目だね。イケメン中年……）
ちょっと緊張した表情を浮かべて面接を受けつつ、凛はそんな第一印象を抱いた。
彼が日本中、いや世界中の注目を集めているスポーツエリート校の理事長なのだ。
臨時採用の講師から出世街道を駆け上り、学園の理事長にまでなった人物である。
彼が就任してからわずか三年で、これという特徴のなかった学園は、日本有数のスポーツ名門校として全国にその名を轟かせるようになっていた。
現在ではオリンピックに代表選手を続々と送り込み、プロスポーツ界を席巻するまでになっている。卒業生たちには内外有名チームのスカウトが群がり、海外の一流チームが破格の契約金でオファーを持ちかけてきた。潤沢な資金を得て、学園は急成長した。
大成功の見本のような学園改革であったが、その立役者に暗殺指令が出ているのだ。
（この男が死に値するかどうか、見極めなきゃね）

「あ、そうそう。男子諸君に言っておくことがあります。今夜は挿入、中出しは無し。それは全国大会制覇後のお楽しみにしておきましょう」

理事長の声を聞いた男子生徒たちは、やや不満げな表情を浮かべたが、彼の言葉は絶対なのか、不平を漏らす者は一人もいない。

「凛さん、君の身体は彼らの命令通りにしか動きません。我が校の精鋭たちに精一杯ご奉仕してくださいね。さあ、宴の始まりです！」

最初に近づいてきたのは、野球部キャプテンだった。キャッチャーで四番打者。投手の持ち味を完璧に引き出すリードと、打者の弱点を瞬時に見極める優れた眼力を駆使して、圧倒的な強さで全国大会を制した逸材として世間に知られている。

卒業後は、破格の待遇でプロチーム入りすることが確実視されていた。

「舐め方のサインを覚えるんだ。まずはこれが亀頭吸い、で、これが竿舐め……」

天才キャッチャーは、ピッチャーに球種を指示するときと同様に、指の本数や向きでフェラの細かなサインを指し示してくる。

（そんなもの、誰が覚えるもんですかッ!!）

胸の内で叫ぶ凛であったが、意識は拒んでいるのに、暗殺少女の脳はフル回転して屈辱のご奉仕サインを記憶してゆく。

「じゃあ行くぞ、まずはこれだ」

えちシーン試読みスタート！

目の前で人差し指が振られ、クルクルと回される。『亀頭を口に含んで、舌を回せ』というサインだ。

（嫌だ……こんなの……やりたくないッ！）

拒もうとする心を裏切って身体が動く。コチコチに強張って淫熱を発している肉柱に顔が寄せられ、張り詰めた亀頭を、ハムッと咥え込んだ。

塩辛い味と男の臭いが鼻腔をムワッと突き抜け、凜の心を屈辱色に染め上げる。

「んくっ……いいぞ、俺の顔を見ながら舌を使え」

メガネの美少女を思いのままに操る征服感に鼻息を荒げ、野球部キャプテンは命じてくる。言われるがままに目を動かし、野球部キャプテンの勝ち誇った顔をメガネ越しに見上げた暗殺少女は、ぎこちない動きで舌を動かし始める。

ちゅぱ、ちゅぱ、ちゅく、くちゅッ……。

唾液の鳴る音を立てつつ、ツルリとした亀頭の曲面をクルクルと円を描いて舐め回すと、快感に反応した牡槍は、ビクッ、ビクビクッと嬉しげに震え、硬度と体積をさらに増した。

味覚器官と生殖器官の摩擦が湿っぽい熱を生み出し、それが少年と少女の体温を上昇させてゆく。

指サインに命じられるがままに凜は亀頭を吸いしゃぶり、勃起の胴を横ぐわえにして唇を滑らせ、固く引き締まった陰嚢（いんのう）まで丹念に舐めさせられた。

ピチャピチャという淫らな舐め音と少女の喘ぎ、少年が上げる快感の呻き声が体育館の中にひとしきり続く。

「うっ、上手いじゃないか……出す、ぞっ！」

興奮の極みに達したキャプテンは、少女の喉奥にペニスを突き入れて射精を開始する。

ドクッ！　ドクドクドクドクッ!!

「んぶうぅぅ！」

大きく目を見開いて呻く少女の口に、灼熱の絶頂汁がぶちまけられる。

口から引き抜かれたペニスは激しくしゃくり上げ、メガネのレンズを白濁のスペルマでコーティングした。

視界を真っ白に染め上げ、美貌を汚す熱い体液のシャワーを浴びながら、目を閉じることもできぬ凛。

そういう命令を誰にも下されていないので、目を見開いたままスペルマの洗礼を受けている。

次に進み出てきたのは、テニス部の部長だった。貴公子然とした顔立ちとは裏腹にワイルドで攻撃的なプレースタイルで、テニス界でも話題になっている。

ショートパンツをずり下げ、いきり勃ったものを剥き出しにしたテニス界の貴公子は、凛の髪を荒っぽく掴んで股間に引き寄せる。

「くうぅッ!!」
苦痛に呻く凜の顔を、いきり勃った亀頭が突き回した。
「オナニーしながらしゃぶれ。スカートを脱いで、みんなにも見えるようにするんだ！」
凜の身体は、屈辱的な指令を機械的に実行してしまう。
制服のスカートが、スルリと脱ぎ落されて膝のあたりにわだかまった。色白な太腿と、プリッと引き締まった美尻が、天井からの照明に白く照らし出される。
恥丘の丸みをふっくらと浮き出させたショーツの股間には、すでに小さな楕円形の濡れ染みができていた。
恥ずかしい染みを隠すように、凜の手指があてがわれる。
（やだ……私のここ、凄く熱くなってる……）
薄い布越しに感じられる秘部の火照りと、しっとりと濡れた感触に羞恥する凜。
そんな彼女の恥じらいを無視して、屈辱のオナニーが開始された。
マシュマロのような弾力で指を押し返してくる肉厚の大陰唇をフニュフニュと揉み、ショーツの布地を秘裂に深々と押し込むようにして中指が滑る。
シュッ、シュッ、シュッ、シュッ……。
股布を指が擦る布ずれの音が、シンと静まり返った体育館に流れた。
（人前で……オナニーなんて……ッ！）

コクリとうなずいた凛は、競泳水着の股布を横にずらし、濡れそぼった秘裂に巨根の先端を誘導する。

クチュ……小さな粘音を立てて、赤黒い亀頭がトロリと潤む膣口に接触した。

（大きい……これが入って来るんだ……）

圧倒的な亀頭の圧力を膣口に感じただけで、妖しい期待感が少女の身体をわななかせる。

自己破壊の衝動と一体化した興奮に突き動かされ、凛はジワジワと腰を沈み込ませてゆく。

「理事長先生のが、入って……んはぁぁぁ～」

可愛らしくも艶めかしい吐息を漏らしながら、暗殺少女はフィガロのペニスで自分を貫いてゆく。

くちゅ……ぬぷぅ……。

「うっ……つぅ……」

亀頭がめり込んだところで、凛は苦しげに眉を寄せ、小さな呻き声を上げた。

彼女にとって、男の器官を受け入れるのはこれが初めてであった。

暗殺者になるための激しい鍛練によって、処女膜は自然断裂していたが、それでも初めての挿入には少なからぬ苦痛が伴っている。

下腹の筋肉がキュウッ、と緊張し、素肌にピッチリと張りついた水着生地越しに、腹筋

えちシーン読み試し スタート!

の凹凸が浮き出していた。
「さあ、早くその可愛いオマ〇コにで、全部呑み込むんだ」
亀頭の先端をキュウキュウと締めつけてくるヴァギナの感触にほくそ笑みながら、理事長は挿入の続行を命じる。
「はい……んっ、んんんんっ!!」
ズッ、ズチュウウッ!
少女の膣口を限界まで押し広げて、赤黒い巨根が根本までめり込んだ。
「かは……あふぅ……いっぱい……んはぁぁ」
苦痛と歓喜の入り混じった表情を浮かべ、凜は圧倒的な蹂躙感に酔いしれる。
「動くんだ! 激しく、荒々しく!」
生まれて初めてペニスを受け入れた少女には過酷すぎる命令を下す理事長。
「はい……んっ、くぁ! あんっ! あふぅんっ!」
半脱ぎの競泳水着をまとったメガネ少女の身体が、男を貪る上下動を開始する。
むっちりとたくましい太腿が躍動し、引き締まったヒップに、キュッ、キュッ、と筋肉のえくぼが浮かび上がった。
上下動のたびに、大きく張り出したカリ首が処女膣の粘膜をゴリッ、ゴリッ、と擦り、熱く痺れるような注挿感覚を湧き起こす。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/